

錢形平次捕物控

お局お六

野村胡堂

青空文庫

一

紅葉^{もみぢ}は丁度見頃、差迫つた御用もない折を狙^{ねら}つて、錢形平次は、
函嶺^{はこね}まで湯治旅と洒落^{しやれ}しました。

十手や捕縄を神田の家に残して、道中差一本に、着換^{きがへ}の袷^{あはせ}が一
枚、出来るだけ野暮な堅氣に作つた、一人旅の氣樂さはまた格別
でした。

疲れては乗り、屈託^{くつたく}しては歩き、十二里の長丁場を樂々と征
服して、藤澤へあと五六町といふところまで來たのは、第一日の
申刻^{ななつ}過ぎ――。

「おや？」

平次はフト立停りました。

道中姿の良い年増が一人、道端の松の根元に、伸びたり縮ちぢんだり、齒を喰ひしばつて苦しんでゐるのです。

「どうなすつた、お神さん？」

ツイ傍へ寄つて、顔を差覗いた平次。

「お願い、——み、水を——」

なゝめ

斜に振り上げて、亂れかゝる鬢の毛を、キリキリと噛んだ女の

かぶきしばる

顔は、そのまゝ歌舞伎芝居の舞臺にせり上げたいほどの艶あでやかさ

でした。

「癩しやくを起したといふのか、——そいつは厄介だが、——待ちな、

今、水を持つて來てやる。反^そつちやならねえ、どつこい」

平次は女の身體を押付けてゐた手を離すと、ツイ十五六間先の百姓家へ飛んで行きました。まご／＼する娘つ子を叱り飛ばすやうにして、茶碗を一つ借りると、庭先の井戸から水を一杯くんで、元の場所へ取つて返します。

その忙しい働きのうちに、街道筋は暫く人足が絶えて、浪人者が二三人、うさんな眼を光らせて通つただけ――。

「おや？」

平次はもう一度目を見張りました。ツイ今しがたまで、松の根方にもがき苦しんでゐた、道中姿のいゝ年増が、何處へ消えて無くなつたか、影も形も見えなかつたのです。

狐につまゝれたやうな心持で、藤澤の宿しゆくに入ると、旅籠だけは思ひ切り弾はずんで、長尾屋長右衛門の表座敷を望んで通して貰ひましたが、足を洗つて、部屋に通ると、懷中へ手を入れた平次は、「おや／＼そんなものが望みだつたのか、手數のかゝる芝居をしたものぢやないか」

思はず苦笑ひをしたのも無理はありません。頸くびからブラ下げた財布さいふが、何時の間にかやら、見事に切り取られて居たのです。

「どうなさいました、お客様」

入つて來た番頭は、平次の頸にブラブラと下がつた紐ひもに驚いたのでせう。

「ハツハツハツ、巾着切にやられたよ。江戸者も旅に出ちや、か

らだらしがねえ」

「それは大變ぢやございませんか」

腰を浮かす番頭。

「騒ぐほどのことぢやないよ、番頭さん。取られたのは、ほんの小出しの錢が少しばかりさ。まだ小判といふものをうんと持つてゐるから、旅籠賃の心配はさせねえ」

平次はそんな事を言つてカラカラと笑ひますが、盗られた財布の中味は、正直のところ、路用から湯治たうちの雑用を併せて三兩二分ばかり、あとに残つたのは、煙草入に女房のお靜が入れてくれた、たしなみの小粒こつぶが三つだけです。

「お役人に申しませうか」

「いや、それにも及ぶめえよ」

江戸の高名な御用聞、錢形の平次が巾着切にしてやられたとは、さすがに人に知られたくなかつたのでせう。

「左様でございますか、——その御災難の中へ、こんな事を申上げるのは變でございますが、今日は急に御本陣へお行列が入つて、宿しゆくちゆう中一パイになつてしまひました。手前共でも割り切れない

ほどのお客様で、どうすることも出来ません。御迷惑様でも、相客をお二人ばかりお願い申上げたいのでございますが、如何でございませう」

番頭は敷居際に坐り込んだまゝ、一生懸命手を揉もんで居ります。「いゝとも、十疊に一人ぢや勿もつたい體ない。二人でも三人でも、案

内して來るがいゝ」

「では――」

番頭は引込むと、間もなく二人の屈強な武家を案内して來ました。

「――」

平次は危ふく聲を出すところでした。相客といふのは、先刻街道筋で、女^{をんな}巾着^{きんちやく}切^{きり}を介抱してゐる時、近々と眺め乍ら、素知らぬ顔をして通つて行つた、二人の浪人者に紛れもなかつたのです。

「なんだ、町人か」

向う疵きずのある、大柄の浪人は、平次を睨め廻し乍ら、部屋の眞ん中にドツカと坐り込みます。

「蟲だと思ったら腹も立つまい、我慢をせい」

續くのは小柄の中年男。

「俺はその蟲が大嫌ひでな。蚤のみしらみ、虱み、バツタ、カマキリ、百足蟲むかで、

——蟲と名のつくものにろくなものがない」

「目障りだつたら、捻ひねり潰つぶすだけの事だ。まア湯へ入つて一パイやらかさうか」

平次は驚きました。世の中にこんな無法な武家があるものでせ

うか。見れば酔つてもゐない様子、

『^{さは}觸らぬ神に崇^たりなし』といつて、その頃の人に共通の逃^{たうひてき}避^ひ的^{てき}

な心持で、平次は殊勝らしく部屋の隅つこに小さくなつたのです。

やがて交る／＼風呂に入つた二人の浪人者は、一本つけさし

て、互に獻^{けん}酬^{しう}を始めました。平次はその間に部屋を出て、懷紙

に帳場硯^{すゞり}でサラサラと何やら認^{した}め、店先に立つて宵の街を眺めて

居ります。

その頃の街道筋の賑ひは、今日想像したやうなものではなく、

大名の行列だけでも、日に幾つも通ることがあり、上り下りの旅

人、諸藝人、武士、僧侶、あらゆる階級の人の間を縫つて、諸大

名の早飛^{はやびきやく}脚や、十一屋の定飛脚などが、夜晝の別なく通つて居

ります。

平次はそのうちの一人、夜道をかけて江戸へ行く早飛脚を見付けると、たつた三つしかない一朱銀のうちの一つを、先刻書いた手紙にクルクルと包んで、飛脚の眼の前にポンと投りました。

「おや？」

思はず立止つて、それを拾ひ上げた飛脚は、クルクルと懷紙をほぐして、店先の灯に透あかりすかしましたが、四方あたりに投げた人影もないのを見定めると、腹掛の中へポンと落して、サツと平塚の方へ飛びます。

始終の様子を物蔭から見た平次、忍ぶともなく蹙あしおと音靜かに元の部屋に歸りました。

「足を折るのが一番いゝ、——血を流すと事面倒だ」

「一人だけ、この宿に踏止まつて、役人の方を引受けるつもりなら、少し位は傷を負はせても差支へあるまい」

漏れて来るのはこんな言葉です。平次はさすがにギョツとしましたが、思ひ直した様子で、靜かに入ります。

「これ町人」

「へエ——」

「出入りには挨拶位するものだぞ。いきなり唐紙からかみを開ける奴があるか、馬鹿野郎」

「へエ、相済みません」

絡み付いて来るのを、平次は軽くかはしました。

「飯が濟んだら腰の物の手入れをしよう。いざといふ時、武士の魂が役に立たなくては濟まぬ」

「いかにも、それはいゝことに氣が付いた」

二人は灯を中^{あかり}にして、ギラリギラリと長いのを引っこ抜きました。

「どうだ。見事だらう。貴公の備前物^{びぜんもの}は、大層な自慢だが、到底この相州物には敵ふまい」

小さい方の武家は一刀をギラリギラリと振り廻しました。

「なんの、刀は體裁や見てくれで切れるものか。本當の切れ味は俺の備前物の方が、どんなに優^{すぐ}れてゐるか判るまい」

「よし、それなら、試し斬りをして見ようか」

「應ツ、望むところだ。が、何を斬るつもりだ。巻藁まきわらなどは嫌だぞ」

「幸ひ其處に生きたのが居るではないか」

「成程、手頃な肥ふとり具合だ。これ、町人」

平次はさすがに膽きもを潰しました。長い間御用聞をして居りますが、まだ、こんな無法な人間に逢つたこともありませんが、

これが旅先でなかつたら——もう一つ、大事な目的もくてきのある旅でなかつたら、平次も娑婆しやばつ氣を出して、二人の浪人者を取りひいだかも知れません。が、得意の投錢を飛ばすにしても、あと煙草入に、小粒が二つこつきりでは、平次の戦闘力は半分になります。

「逃げるか、町人」

「其方はどうも氣に入らないところがある。それへ直れ」

大柄の一人は早くも入口を塞いで大上段に振り冠り、小柄の一人は、一刀を正眼に、平次のうしろからジリジリと迫ります。

何も彼も、平次と見込んでの嫌がらせらしく、何方の氣はひを見ても、脅かしや酔狂でないことは、平次にもよく解ります。

「御免蒙りませう。あつしは斬られつけないから、そんな遊びの相手にはなりませんよ」

「何をツ」

早くも脇差を腰に、振り分けの荷を右手にさらつた平次は、中腰になつて、二人の隙を窺ひます。

「こいつは面白い。鳥も飛ばなきあ撃つ張合がないといふものだ、逃すな」

「應ツ、此處は鐵壁だ。蟻一匹這ひ出させるこつちやねえ」

前後から迫る刃、平次は相手の深刻な害意を讀むと、もう躊躇しませんでした。脇差を引っこ抜いて、武士と渡り合ふのを不穩當と思つたか、右手に掴んだ振分けの荷、——それを入口を塞いだ大男の股倉へパツと抛つたのです。

「わツ」

不意を喰らつて、大男は前のめりになりました。咄嗟の隙に乗じた平次、一氣にその頭を飛越して廊下へ——。

「無禮者ツ」

後ろから追ふ二人の浪人者。旅籠屋中は引くり返るやうな騒ぎになりました。

二條の刃に追ひ詰められた平次は、暫らく廊下を逃げ廻つて居りましたが、何の部屋も必死と内から障子を押へて、平次を入れてくれさうもないのを見ると、浪人者の姿が納戸の蔭に隠れた機會を掴んで、階段の下に行燈部屋の中へ、パツと飛込んだのでした。

「あッ」

低い小さい聲乍ら、異常な驚きにかき立てられた女の悲鳴です。行燈部屋と見たのは、混み合つた時は矢張り客を入れる部屋だったのでせう。長四疊の灯は消して、窓から入る月の光りでは、女

の素姓もはつきり讀めません。

二人の浪人は暫らく其邊中を探して居る様子でしたが、最後に平次の隠れた部屋をパツと開けました。

「何だ此處にも人が居るぞ」

一歩大きな浪人が踏込みます。

「此處は女一人でございます。御無體をなさいません様に」

凛^{りん}とした聲、——入口に立ち塞^{ふさ}がつたのは、異^い香^{かう}薰^{くん}ずるやうな部屋の主でした。

「何、女一人？」

さすがの無法者も、面喰らつて引下がりました。

「女一人でも油斷はならぬぞ、一應中を見せて貰はうか」

小さい方の浪人は、その背後から警戒の眼を光らせました。

「取亂して居りますが、どうぞ御覽下さい」

女はツト身を引きました。それを追つて廊下の灯を背にした四つの眼。

「フーム、居ないぞ」

「外へ飛出したのかも知れぬな」

「逃げ足の早い奴だ」

二人はポンポンとして引揚げます。

女はその後姿を見送つて、靜かに行燈あんどんに灯を入れ、鬢びんと襟を直して、押入の戸を開けました。

「もう大丈夫でございます。無法者は行つてしまひました」

「有難い、——飛んだ御迷惑をかけました」

ひよいと押入から出て來た錢形の平次、何心なく行燈の灯の中に、女と顔を見合せて立竦たちすくみました。

「あッ、お前さんは？」

まぎ

紛れもない、夕刻藤澤の宿の入口で、癪しやくを起して苦しんでゐた

女——、水をくんで來るうちに、行方不明になつた女——、平次の頸にかけた、財布さいふの紐ひもを切つて抜いた女——。

「まあ、私は」

女は兩の袂たもとを顔に當てて、身も世もあらぬ様子で疊の上に突つ伏しました。

「お前さんに助けられようとは思はなかつた、これはく」

「――」

「癪はどうしたえ、――」

平次は漸やうやく落着きを取戻して、萎しをれ返つた女を觀察しました。

精々二十三、町人の女房が江の島詣りに行くと行つた身輕な風をして居りますが、様子にひどく上品なところがあつて、武家の新造、奥方といつても恥かしくないでせう。

それよりも平次を驚かしたのは、氣位の高さうな取濟した底に潜ひそむ、冷美といつてもよい不思議な美しさでした。それを見詰め

てゐると、冷たい焰に對して感ずるやうな、恐ろしい蠱惑こわくと懊惱をさへ感じさせるのです。

「親分さん、——濟みません。飛んだことをしてしまひました。——私の本意でなかつたわけは、親分の懷中物を、私の身に着けてゐないことでもお解りでせう。幾らあつたか存じませんが、せめてこれでお許しを願ひます」

女はさう言つて、自分の帶の間から赤い紙入を抜いて、平次の方へ押しやるのでした。絶えも入りたげな面目なさに、長い睫毛まつげを伏せたまゝ、——、悪い女も随分大勢見て來た平次にも、唯ただの巾着切や胡麻ごまの蠅はへとは思へないぢらしさです。

「お前は唯の惡人らしくもねえが、——惡戲いたづらにしちや、少し念

が入り過ぎるぜ。一體どうして人様の物に手を掛ける氣になつたんだ」

「申上げませう、親分さん」

女は精一杯の努力で顔を挙げました。睫毛は濡れて、赤い唇が激情にヒクヒクと顫へます。

その物語はかなり長いものでした。が、筋は、——女の名はお六——武家の娘で本當は祿と書くのだが——、少女時代にさらはれて道中胡麻の蠅の手先になり、つかくくと娘盛りの二十歳^{はたち}を越してしまつたといふのです。

もつと

尤も一度は惡者の手を逃れて、江戸番町の親の家に歸りました。が、少女お六が誘拐^{かどはか}されるとき、父親の鎌井重三郎は人手にかゝ

つて非業の死を遂げ、家祿は沒收^{ぼつしう}、母親はそれを苦に病んで父の後を追ひ、その後を襲^つぐ者もなく、鎌井家は沒落^{ぼつらく}、お六は再び悪者に引戻され、美貌と器用さを重寶がられて、浮ぶ瀬もなく悪事に沈淪^{ちんりん}して居たのです。

「こんなわけで、私は目の前に父親の仇を見乍ら、討ち果すこともならず、不本意乍ら悪者の手先になつて、うか／＼と日を過しました。でも、今日といふ今日、悪い夢の醒^さめたやうな心持が致します。——此上のお願ひには親分さん、この私に親の敵を討たせ、重なる罪のお處刑^{しおき}を、立派に受けさせて下さいませんか、お願ひでございます」

「——」

「親分さんのやうな方に助太刀をして頂いたら、私にも親の敵が討てないこともないでせう、お願い」

お六の手はツイ伸びて、平次の膝を揺ゆぶります。

「巾着切から敵討か、そいつは驚くぜ。まアいゝ。三幕目は何にならうと、俺の知つたことぢやねえ、——ところで、その敵の名前や顔が解つてゐるのかな」

平次は漸く積極的になりました。

「中國浪人久留馬登之助、——顔に向う疵きずのある、三白眼ぱくがんの大男、海道筋に響いた無法者でございます」

「あ、あれだ」

「御存じで？ 親分さん」

「ツイ今しがた、ぬきみ抜刀で俺を追っかけた浪人だ。あれは滅多に間違へる人相ぢやねえ」

「親分さん、——さうと氣が付けば放つては置けません、お願いします」

包の中からあひくち匕首を取出したお六、平次の止める隙もなく、廊下へパツと飛出しました。その突き詰めた様子や、けいせふ輕捷な物腰など、思ひ付きの芝居とも思はれません。

さそ誘はれるともなく、平次も飛出しましたが、その時は、もう二人の浪人は旅籠屋になんくせ難癖をつけて、何處ともなく立去つた後でした。

四

翌る日の朝は、運悪くドシヤ降り、早立ちは駄目になりましたが、間もなく素晴らしい秋日あきびより和になつて、上り下りの旅人は一ぺんに旅籠屋から流れ出しました。

伊勢詣り、湯治客、國侍、飛脚馬ひきやくうま——などと一緒に平次とお六も此上もない長閑のどかな旅を續けたのです。

お六は女巾着切に似ぬ教養のある女で、平次も時々受け應へに困ることがありました。武家育ちといふだけに、諸藝、歌、俳はいか諧はいにまでたしなみがあるらしく、次から次へと、話の種は盡きません。

小田原へ着いたのは丁度六つ少し前、飛脚馬も、伊勢詣りも、武家も町人も、大抵たいていは其處で泊りました。函嶺はこねまでは四里八町、夜道には少し遠過ぎます。

平次とお六が泊つたのは、とら屋三四郎、晩ばん酌しやくを一本つけて、さて、話が枝がさし葉しげが繁ります。番頭は夫婦と見たか、駈か落者けおちものと見たか、ひどく心得て同じ部屋に泊めるつもりなのを、

「そいつは困るぜ、二人は唯ただの道伴れだ」

平次は野暮やぼなことを言つて大きく手を振ります。

「まあ、親分さん、——」

お六は何時までも離れともない風情でした。が、さすがに打ちあけてさう言ひ兼ねたものか、モヂモヂし乍ら自分の部屋に引下

がります。

「誰だい、入口の漆喰壁^{しつくひかべ}へ、消炭なんかででつかい圓と四角を描いたのは？」

帳場の方でそんな聲がしました。多勢の雇人達が、いろ／＼評議をして居る様子ですが、結局誰の惡戯^{いたづら}とも解りません。

暫らく經ちました。

平次は手水場^{てうづば}から歸つて來て、さて寢ようとする、

「親分さん」

そつと廊下の外から聲を掛ける者があります。柔かな匂^{やはら}ふやうな聲。

「お六さんかい」

「お願いがありますが、入つて構ひませんか」

「いゝとも、まだ寝たわけぢやねえ」

「では」

滑るやうに入つて來たお六、寢卷姿に、少し取亂して居ります
が、何か異常な緊張に、ワクワクして居る様子です。

「どうしたんだ、お六さん」

「親分さん、——お約束を守つて下さるでせうね」

「約束？」

「敵、久留馬登之助の所在ありかがわかりました。今夜、今すぐ名乗
りかけて討ちたいと思ひますが——」

お六は華奢きやしやな肩を落して、怨ゑんずる姿に平次を見上げます。

「そいつは早速で面喰らはせるぜ。何處に居るんだ、その敵役は？」

「先刻、この旅籠屋の入口で、番頭と話して居るのを二階の窓から聞きました。——親分が泊つていらつしやると聞いて、夜道をかけて函嶺へ登つたやうで——」

「へエ——、昨夜はあんなに俺を追ひ廻して、今晚は向うが逃げ廻るのかい」

「親分さんが敵討の助太刀をすると氣が付いたので御座いませう」
「今晚は御免蒙ごめんかうむらうよ、お六さん」

平次は沒義道もぎだうにクルリと背を見せました。

「でも、親分さん、あんなに堅くお約束をした筈ではございませ

んか」

「俺は約束をしたやうな覚えはねえよ。お六さんが自分の心持で一人極めにしたんぢやないか」

「でも」

敷居に崩折れるやうに、お六の怨あんなじた眼は妖ようえん艶を極めます。

「それに、俺は夜の仇討が大嫌ひさ。同じ事なら、竹矢來を組んでよ、檢視けんしの役人附添の上、ドンドンと太鼓を叩いて、揚幕から靜しんぐぐと出てみたいやな。鎖帷子くさりかたびらに身を固めて、大ダンビラを肩でしごとく、後ろから眞つ赤な朝日が出る、——皆んな極つた型のあるものだ」

平次はすっかり茶かし氣味です。

「親分さん、本當に眞劍に聞いて下さい。久留馬登之助の隠れ家は、湯元から山道を入つて、ほんの五六町のところにあります。今晚は其處に泊るに違ひありません。親分さんと二人押し掛けて名乗りをあげたら、萬に一つも取逃すやうなことはないでせう」

「――」

「此處からほんの一里半足らず、敵を討つても夜中こゝのつまでには歸つて來られます」

「歸つて來る？」

「小田原へ歸らうと、其儘函嶺を越さうと、親分さんのお心持次第になります」

お六は本當になやましさうでした。何處までも茶かし氣味な平

次の顔を見上げて、たうとう涙さへ流してゐるのです。

「成程、さう聞けばわけのないことだ、夜中こゝのつ前に歸つて來るといふことにして、出かけてみようか」

「親分さん」

お六は本當に嬉しさうでした。平次がもう少し甘い顔をしたら、飛付いて手ぐらゐは取つた事でせう。

二人は銘々めいぐに支度をして、そつと旅籠屋を拔出したのは、それから間もなく、闇の小田原街道を、手に手を取るやうな心持で、はこね函嶺の三枚橋を渡りました。

「此處から少し道が悪くなります」

お六の注意までもなく、途は本街道を遙はるかに外れて、次第せまに狹

く、次第に險けはしくなりました。

「親分さん」

崖がけや岩に攀よぢのぼ上るとき、お六は決して下から手を差伸べ、少し

甘い調子で救ひを求めます。

「――」

平次は時々舌打をし乍ら、それでも、心せく様子で、グイと引揚げてやりました。

「まア、何て、邪慳じゃけんなんでせう」

「邪慳なのは生れ付きさ」

さう言ふ平次へ、お六は時々物に怯おびえたやうに飛付いたりし乍ら、何うやらかうやら目的地に着きました。

「此處——親分さん」

お六は囁やき乍ら、山の盆地を指さしました。林に三方を圍まれて、嚴重さうな山小屋が一つ、——中には灯も何にも見えません。

「誰も居る様子はないぢやないか」

「久留馬登之助は何處かへ廻つたのでせう。いづれ此處へ來るに違ひありません。入つて待つて居ませう」

お六は何の恐れ氣もなく、山小屋の中に入りました。續く平次。「恐ろしく暗いんだな」

「灯をつけるわけに參りません。暫らく此處で待つて下さい」

「——」

平次は高を括つた心持で、小屋の中にドツカと坐りました。

「ね、親分さん。首尾よく敵討がすんだら、私を江戸へおつれ下さるでせうね、——足を洗つて、今度こそは堅氣になりますか——」

「お六さん、それは誰に言つて居ることか、お前さん知つてゐるのかい」

「——」
「この俺が誰だか、知つて居なさるのかと訊いて居るんだよ」

「——」

「お前は、物腰が上品だからと言ふので、お局のお六といはれた、名題の女道中師だらう。今まで積んだ悪業あくごふの數々、それが、砂す

なもし
文字を消すやうに、綺麗になると思つて居るのかい」

平次は到頭、言ふべきことを言つてしまつたのでした。

「では、私も申します、——錢形の平次親分さん」

「え？」

「それ位のことを知らずに、大それたこんな芝居は打てるでせうか、——私はいかにもお局つぼねのお六に相違ございません。——でも、今晚小田原の旅籠屋にいらつしやれば、錢形の親分は、間違ひもなく殺されなすつた筈ですよ」

「——」

「仲間は正亥刻半よつはんを合圖に五人で斬り込む筈、それがいけなければ、鐵砲位は持出し兼ねません。今頃は親分の姿が見えなくなつ

て、さぞ大騒動をしてゐることとせう」

「そいつは本當か」

「今更駄引をいふ私ではございません。そのうちに、仲間が私の足跡あしあとを嗅かいで、此處へ來ると事面倒になります。私は一と走り、方角を外れそさして來ませう。こゝを動いてはなりません、親分」
お六は命令する調子で言ふと、

「待つた」

平次の聲を耳にもかけず、ヒラリと山道の闇の中に姿を隠しました。

五

「親分」

女はそつと小屋の中へ滑り込みました。あれから小半刻も経つたでせう。

「――」

平次は暗がりの中に、腕を組んだまゝ、木像のやうに黙りこくつて居ります。

「親分さん、――大變なことになりましたよ」

お局のお六の聲が、激情に弾^{はず}みます。狭^{せま}い小屋の中は、この女一人を入れただけで、近々と體温を感じるやう。

「――」

が、平次は相變らず黙りこくつたまゝ、壁の方を向いて、プツリとも音をあげません。

「親分、まさか座禪ざぜんぢやないでせうね。返事位はして下すつたら

——？」

「——」

「でも黙つて聞いて貰つた方が、言ひいゝかも知れない。幸ひ顔も見えないし」

「——」

「親分さんが、何の用事で函嶺はこねへ來たか、それはよく解つて居ますよ、——大公儀から、駿府すんぷへ送る御用金が六千兩、二千兩の箱が三つ、馬に積んで、井上玄蕃様が宰さいりやう領やうをして、わざと大袈おほ

げさ
 袈な守護はつけず、錢形の平次親分がたつた一人、御鑑定に叶つ
 て、函嶺の關所を越すまで、かげなが蔭乍ら守護して來るといふ話は、
 海道筋を繩張りにしてゐる、私達の耳に入らずに居る筈はない――

「――」

お六は大變なことを言ひ始めました。

「井上玄蕃様は木像でくも同様、あとは馬子と青侍が二人だけ、錢形
 の親分の目さへ光らなきや、六千兩は此方のものと、計略けいりやくは
 前々から、練りに練られました。最初に親分の懷ふところを抜く役目を引
 受けたのは此の私」

「――」

「假病^{けびやう}をつかつて、首尾よく親分の懷中は拔きましたが、路用がまだ残つて居るとは氣が付きません。その晩は、久留馬登之物ともう一人の仲間が、親分に喧嘩を吹かけ、手足を折るか、淺傷^{あさで}を負はせるか、兎も角、旅を續けられないやうにする筈でしたが、親分が相手にならなかつたので、それも駄目」

「――」

「私の部屋に逃げ込んだのを幸^{さいは}ひ、道づれになつて、親分の氣を外^そらせようとしたが、親分の目は一刻半刻も、六千兩の荷から離れることではございません」

「――」

「仲間の者はジレ込んで、いよく親分を殺すことに決めました、

——手引はこの私と、手筈まで調つた時、私は、何うしたことか、親分を殺すのがイヤになつたのでございます。親分も殺さず、六千兩も無事に奪ひ取つたら、科は^{とが}宰領の井上玄蕃が一人で背負^{しよ}ひこむ筈——と、仲間の者に隠れて親分をそつと此處へ誘^{さそ}ひ込みました」

「——」

不思議な惱ましさに、お六の言葉は暫らく絶えます。平次も救ひ、仲間にも反かず、六千兩も首尾よく奪ひ取る細工が、どんなに女らしく、陰險に、緻密^{ちみつ}に運ばれたことでせう。

「でも、仲間の者は私の裏切に氣が付きました。總勢十五人、そのうち三四人は、間もなく此處に向つて來ることです」

「――」

「親分さん――逃げて下さい――と申上げたいけれど、私はその氣になれない。それに、――今頃はもう山の中の何處かで、六千兩は仲間の手に奪ひ取られた筈。此まゝ江戸へ歸られる錢形の親分さんではないでせう――」

「――」

平次の頭は、闇の中に強く動きました。

「いえく嘘^{うそ}ぢやございません。親分が小田原の旅籠屋を逃げたと知ると、仲間の者が駿府の使に化けて、小田原に向ひ、明日早朝、關所手前で、御用金を受取りたい、夜中御苦勞乍ら、その手配を付けるやうに――と申込まれ、井上玄蕃は錢形の親分の留守

中も構はず、六千兩の金を馬につけて、ツイ今しがた函嶺の山道へかゝつた筈――」

「――」

平次の首はまた激しく動きます。

「さア、親分さん、一緒に此處を立ち退きませう。親分は江戸へ歸られず、私は仲間のところへ歸られないとなると、二人の行先は京大阪の外にはありません」

お六は執拗に絡み付いて、その手は默然として壁の方を向く平次の肩に掛りました。

「馬鹿ツ」

平次はすつくと立上がりました。その弾みに、長大な身體が小

窓のところまで伸びると、隙間漏る月の光が、丁度その顔のところに照らしたのです。

「あツ」

平次と思ひきや、何時の間に入れ替つたか、それは大きな馬顔。「馬鹿ツ、何といふ女だい」

言ふまでもなく、錢形平次の子分、ガラツ八の八五郎でなくて誰であるものでせう。

「お前は、お前は？」

「よく覚えて置け。錢形親分の右の片腕といはれた、小判形の八五郎だ、——親分が何時までこんなところにマゴマゴして居るものか」

「えッ」

「ざまア、見やがれッ」

ガラツ八は小屋の入口から外へパツと飛出さうとしましたが、いけません。小屋は全部外から鎖とぎした上、入口の——今お六の入った締しまりは、闇に馴れないガラツ八の眼ではどうしても捜せなかつたのです。

そのうちに、パチパチパチと物のはぜる音がして、夜風が一陣の煙をサツと室の中に吹込みます。

「まア、悪かつたワねえ、でも、錢形の子分なら、満更諦あきらめられない事はない。観念して私と一緒に焼け死んでおくれ」

「野郎ッ」

「海道一の良い女と焼け死ねば、お前も本望ぢやないか。諦めて、丸焼になつておくれよ。錢形の親分が私と一緒に逃げる氣にならなきや、どうせ一緒に焼け死ぬ筈だつたんだから」

「――」

ガラツ八はもうその毒舌に取合ひませんでした。そのうちに駆け付けた悪者の仲間が二人、三人、小屋の中に裏切つたお六と、錢形平次が居るものと早合點して、どつと喊かんせい聲をあげ乍ら、小屋の四方に薪まきを添そへます。

「お前は随分變な顔だねえ」

「勝手にしやがれ」

小屋の一角を焼き抜いて、クワツと燃え立つ焰。

「可哀想で助けるんぢやない、お前と心中するのが役不足だから助けて上げる、——さア、私の氣の變らないうちに、其處から出て、仲間の眼を免れる^{のが}ことが出来たら、本街道を畑^{はたじゆく}宿の方へ行くがよい」

「——」

お六はさう言ひ乍ら、ガラツ八をかきのけて、隠^{かく}し掛金を外したのです。

「親分の平次に逢つたらさう言つておくれ。男に心引かれたことのないお局^{つぼね}のお六が、岡つ引に癪^{しゃく}の介抱をして貰つたばかりに、火の中で死んでしまった——と」

「——」

クワツと又一角を燃え崩^{くづ}して、焰^{どとう}は怒濤の如く小屋の中へ――。

「御用面^{づら}をしたつて、この私は縛れないよ。さア歸つておくれ、お前なんかとは一緒に死んでやらないから」

どつと尻火を切つた中に、觀^{くわんねん}念^{まなこ}の眼を閉ぢたお六の姿、八五郎はさすがにその手を取つて引つかつぐ氣力もありませんでした。

お六の開けてくれた入口から、轉^{ころ}がるやうに外へ出ると、
「それツ、逃すなツ」

飛付いて來たのは三人の惡者、――幸ひ大した腕でなかつたと見えて、八五郎の死物狂ひの襲撃に驚いて、パツと三方に散りました。

「手前達は後で縛つてやる、凝ぢつとして待つて居やがれ」

岩も藪も一足飛に——焰の中のお六に心引かれ乍ら、密林の闇に飛込んでしまひました。

六

かくある可しと期待した平次は、ガラツ八を山小屋に置いて、三枚橋のあたりに網を張つて待ちました。

間もなくやつて來たのは井上玄蕃げんぱと、御用金六千兩を積んだ馬と、馬子と、青侍が二人、——函嶺の關所さへ越せば、あとは駿す府んぷから數十人の警護の者が來てゐると聞いて、喜び勇んで函嶺の

山道へかゝつたのです。

平次は舌打を一つして、見え隠れにその後に従ひました。あれほど嚴重に注意して置いても、平次の姿が見えなくなると、『何を岡つ引め』で、すぐこんな勝手な行動をする、井上玄蕃の頭の悪さに愛想が盡きたのです。

やがて畑宿を越して、ふたこやま双子山の麓ふもとを廻つたのは、眞夜中過ぎ。

函嶺の山道でも、此邊は一番淋しいところですが、あと一と丁場で關所と思ふせるか、馬子も青侍も、大した警戒をする様子はありません。

暫らくすると、麓近い密林の中に、ポーツと焰があがります。

——やつたな——

平次はさすがにギョツとしましたが、今更引返すわけにも行きません。

甘酒茶屋までもう一と息といふ頃。

近々と梟ふくろが鳴きました。

「おや？」

馬を停めた井上玄蕃げんぱは、藪やぶの中から出た、釘くぎ拔ぬぎのやうな手に足を掴まれて、あつと言ふ間もなく引落されました。

「それツ、曲者ツ」

「油斷すなツ」

二人の青侍が一刀を抜く間ありません。何處から飛出したか、黒装束くろしやうぞくが七八人、三方から取圍んで、水も漏らさじと詰め寄

るのです。

「一人も生かしちやならねえ、口がうるさい」

頭かしらだ立つたのが號令すると、七八本の刃やいばが、折から昇つた月の

光を受けて、三方からサツと殺到するのです。

「えッ、そんな勝手なことをさせてなるものか、平次が相手だ、來いッ」

不意に、御用金を積んだ馬の側に、スツクと立上がったものが
あります。

「何？ 平次、いゝ相手だ」

バラバラと亂れ打つ刃やいば、平次はそれをどう掻かい潜くぐつたか、半分

は同士討をさせて、

「此處だ、馬鹿奴ツ」

^{こぶし}拳を擧げると、平次の手から、函嶺名物の焼け石が亂れ飛びます。

それに勢^{いきほひ}を得て、二人の青侍も、必死の刃をかけ並べ、馬の三方を守つて、激しく切り合ひました。

が、多勢に無勢、暫らくの後、井上玄蕃^{げんぱ}は生捕られ、二人の青侍も薄傷^{うすで}を負つた様子、手馴れた錢を投げられないので、平次の武力も思ふに任せません。

最早これまで——、勝敗の數は定まりました。

畑宿へ一里、關所へ一里、眞夜中過ぎの往來はピタリと絶えて、救ひの道の全くあらうとも思へぬところへ、

「御用ツ、御用ツ、御用だぞツ」

函嶺全山を揺がすほどの聲がして、ガラツ八の八五郎、疾風しつふうの如く飛んで來たのです。

「お、八か」

さすがにホツとした平次。

「俺が來さへすれや百人力だ、——親分。小田原のお役人が、千人ばかり畑宿をくり出しましたぜ」

八五郎の宣傳力の偉大さ。

「助太刀なんか要るものか、錢さへありや俺一人で片附けてやるが、藤澤で掏られて空つ尻だ。八、——穴のあいたのがあつたら少し貸せ」

と平次。

「有難えて、親分に金を貸すのは生れて始めてだ。大判や小判はねえが、穴のあいたのならうんとあるぜ」

懷から取出した大^{でつ}かい財^{さいふ}布、寛永通寶^{くわんえいつうほう}が五六百枚も入つて居るのを受取ると、平次はすつかり有頂天になりました。

「有難てえ、これさへありや」

手に從^{したが}つて飛ぶ投げ錢、惡者達は鼻を叩かれ、頬を削^{けづ}られ、中には眼をやられ、拳^{こぶし}を痛められて、ドツと崩れ立ちます。

相手の氣勢さへ挫^{くじ}けば、八五郎の馬鹿力は最も有^{いうか}效^{かう}に働きます。二人の青持と力を併^{あは}せて、瞬^{また}くうちに生捕^{なま}つた曲^{まが}者が、二人、

三人、五人、——折から關所の方にあがる喊^{とき}の聲。助勢の人數と

見て、残る曲者は、パツと蜘蛛くもの子を散らしてしまひました。

それを見送つて、

「八、有難てえ。お前のお蔭だ」

平次は思はず八五郎の手を取りました。

「親分、あの小屋の中で、女は焼死やけしにましたぜ」

純情家の八五郎は、まだそれを考へて居たのですが、さすがに
 憚はかつて、これ以上の事は言へません。

×

×

×

六千兩の御用金は、その日の朝、關所で駿府すんぷの使に引渡し、平
 次とガラツ八はホツとして江戸へ歸りました。

「よく間に合つてくれたね、八」

つく／＼言ふ平次。

「飛脚ひきやくが氣をきかしてくれましたよ。親分の手紙を見ると、早駕籠はやかごで、夜晝おつ通しに飛んで來たが、あんまり急いで、小田原の旅籠屋の目印めじるしを見落すところでしたよ」

「白壁しらかべに消炭けしずみで描いた丸に四角、あれを錢形と氣のつくのは、廣い世界にもお前だけさ」

平次は會心の笑みを漏しました。

「でも、あの女は可哀想でしたよ。一寸燒跡に寄つて、念佛となでも稱へて行きませうか」

「鬼の念佛だらう」

何にも知らない平次は、まだ洒落しやれを言つて居ります。朝陽にク

ワツと照らされる函嶺の紅葉もみじ——その色に酔ふやうな心持で、二人は麓へと急ぎました。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第十六巻 笑ひ茸」同光社磯部書房

1953（昭和28）年9月28日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1938（昭和13）年11月号

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年1月18日作成

2016年12月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

お局お六

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>